

July 2016

京都大学総合博物館 ニュースレター



平成 28 年度企画展「虫を知りつくす ―京都大学の挑戦―」（2 ページに関連記事）
オオシロアリの兵アリ（右上）とワーカー 奄美大島・屋久島などに生息する日本最大のシロアリ（撮影：松浦健二）

企画展「虫を知りつくす ―京都大学の挑戦―」.....	2
京都大学研究資源アーカイブ 映像ステーションが再開.....	3
チュラロンコン大学自然史博物館での在外研究.....	4
「青空子ども博物館 in 円山」の開催.....	5
中山大学との学術交流協定締結とセミナー開催.....	6
大野照文教授定年退職記念講演会の開催.....	6
新レクチャーシリーズがはじまる.....	7
フィリピン大学からの訪問.....	7
ベトナム国立自然博物館からの訪問.....	7
新しい研究スタッフ.....	8
招へい研究員の紹介.....	9
総合博物館の刊行物.....	10
研究資源アーカイブ通信.....	11
総合博物館日誌（平成 28 年 4 月～6 月）.....	12

平成 28 年度企画展

「虫を知りつくす ―京都大学の挑戦―」

開催期間：平成 28 年 7 月 13 日（水）～ 10 月 23 日（日）

昆虫は今から 4 億年前に地球上に出現し、様々な環境に適応し、驚くべき生きる術を獲得しながら多様化をとげた、いわば、進化が生み出した知恵の宝庫です。その種数は 100 万種を超え、現在知られている全生物種の半分以上をしめています。京都大学では、京都帝国大学の時代から現在に至るまで、日本の昆虫学の拠点として昆虫の生態や進化およびその背景にあるメカニズムの解明に挑み続けています。この企画展では京都大学の昆虫研究者が力を合わせて、昆虫学の最前線をご紹介します。

昆虫自体が多様であると同時に、昆虫を対象とした研究のアプローチも実に多様です。この企画展では、昆虫の多様性と多岐にわたる研究の醍醐味をできるだ



ツバキゾウムシの交尾 下がメス（撮影：東樹宏和）

け分かりやすくお伝えするため、全体を 6 つのブースで構成しました。「昆虫の多様性」、「共進化」、「化学コミュニケーション」、「個体群生態学」、「社会性昆虫」、「人との関わり」の順に系統立てて理解いただけるよう工夫を凝らしています。また、見る人を飽きさせない目玉展示も多く用意されています。例えば、120 × 100 cm の大型ガラスセルを用いて日本最大のシロアリであるオオシロアリ（表紙写真参照）の生体展示を行い、巣の中で巨大な 1 万匹のシロアリが活動する様子を一目でご覧いただけます。また、竹の中で酵母菌を栽培して幼虫を育てるコメツキモドキの生体展示では、昆虫が営む農業の様子を観察できます。

昆虫は熱帯から極地に至るまで、陸上のほとんどあらゆる場所に生息しています。そして、それぞれの場



シロアリの卵に擬態する菌類ターマイトボール（撮影：松浦健二）

所の環境に応じて、昆虫の姿は驚くほどに多様です。ブースⅠの「昆虫の多様性」では、昆虫がどのようにして、それぞれの環境に適応した見事なたちと生きざまを進化させてきたのか、最先端の研究を交えてご紹介します。また、昆虫は「かたち」の多様性もさることながら、彼らを取りまく動植物、菌との関係性にも驚くべき多様性があります。「食う・食われる」といったせめぎあいの関係から、互いに相手の助けを必要とする関係まで、多様な相互作用には、ふたつの種が共に歩んできた「共進化」の歴史が隠されています。ブースⅡの「せめぎあう・共に生きる」では、ツバキシギゾウムシの極端に長い口吻の進化やカンコノキとハナホソガの絶対送粉共生の研究など昆虫とそれを取りまく生きものたちの相互作用の研究について解説します。

同種の他の個体や他の種とのコミュニケーションのため、多くの昆虫が匂いや味を用いています。その匂いや味の特徴を決めているのは、もととなる化学物質の「かたち」です。「かたち」を表す構造式を明らかにすることで、昆虫のコミュニケーションは私たちの目に見えるものとなります。ブースⅢの「昆虫の化学コミュニケーション」では、化学物質を介した情報のやり取り、いわば虫たちの会話を解読する研究について紹介します。

昆虫の個体数がどのように決まっているのか、その仕組みを明らかにすることは、病害虫管理など農業生



サバクトビバッタの大発生（撮影：前野浩太郎）

産にもかかわる問題であり、古くから研究がすすめられてきました。ブースⅣの「数はどうやって決まる？」では、実験室内から野外、そして多くの種が共存しながら進化する生物群集の研究へと京都大学における研究の歴史もふまえてご紹介します。

私たち人間は社会をつくって暮らしていますが、昆虫の中にも多くの個体が巣の中に集まって社会生活を営んでいるものがあります。人間のそれとは成り立ちこそ違うものの彼らの複雑な「社会」の仕組みから、

私たちが学ぶべきことが多くあります。ブースⅤの「社会性をもつ昆虫たち」では、アリ・ハチ、シロアリなど社会性昆虫の社会の仕組みやそれらの進化の謎に迫ります。古くから、昆虫と人間とは深い関わりをもってきました。農作物を食いあらず害虫として、絶滅の危機にひんした保護すべき生物種として、そして、不思議な生活を送る魅力的な小さな生き物として。ブースⅥの「昆虫とどう付き合うか？」では、アフリカで大発生するサバクトビバッタと人の戦い、農業における天敵利用、外来種問題、絶滅危惧種の保全活動など、多様な昆虫と人間の関わりについて紹介します。

最後に、昆虫は子供が自然に対して興味を抱く上でも、最も身近で、大きな影響を与える存在であり、どこでも誰にでも開かれている「科学への扉」です。虫好きの少年少女から、最先端の昆虫研究を知りたい方まで、突き詰めて研究したからこそ見えてくる昆虫の面白さを是非味わっていただきたいと思います。

（農学研究科 教授 松浦健二、
農学研究科 助教 土畑重人）

京都大学研究資源アーカイブ 映像ステーションが再開

京都大学研究資源アーカイブ映像ステーションは、移転のため約2ヶ月の一時閉館を経て、4月28日（木）にリニューアルオープンしました。場所は、総合博物館1階ロビーのOAフロアです。

2ヶ所に個人閲覧用ブース、南（壁）側にパネル・モニターでの研究資源アーカイブや映像コンテンツ、デジタルコレクションの紹介があります。OAフロアの中央部や窓側に机、椅子、ソファを置き、グループワークや議論もできます（椅子を増やして利用することもできます）。個人閲覧用ブースは、端末PC、ステレオスピーカー、ヘッドホンを備え、2名分の座席があります。各ブースでは、自由に映像コンテンツを視聴でき、京都大学デジタルアーカイブシステム Peek のデジタルコレクションも閲覧・検索できます。Peek のデジタルコレクションは、映像ステーションだけで公開している分があります。以前の映像ステーションにあった映写コーナーはありませんが、南側の壁面とプロジェクタを利用して映像等を投影できます。



OAフロアに面した円柱部分には、パネルを設置する予定です。また、以前の映像ステーションで上映していた記録映画は再開の予定はありませんが、ミュージラボのモニターを使った映像コンテンツの上映も検討しています。映像ステーションにご注目いただき、ぜひ足を運んでみてください。

（総合博物館 講師 五島敏芳）

チュラロンコン大学自然史博物館での在外研究

タイ・バンコクにあるチュラロンコン大学理学部の自然史博物館で、2015年9月～2016年1月にかけての4ヶ月間、チュラロンコン大学の訪問研究員として同大学の経費により在外研究を行った。2つの研究テーマに取り組んだが、一つ目は「アジアにおける哺乳類の種多様性研究」、もう一つは「大学博物館の役割と機能の再定義」である。チュラロンコン大学はタイで最も古く、大きな総合大学である。チュラロンコン大学理学部で霊長類の研究が専門の Suchinda Malaivijitnond 教授のもとで共同研究を進めた。また、動物学や博物館科学における研究交流を行った。私にとってタイは2014年にはじめて行き、今回は3度目である。これまでは会議や学会参加だけで、実際にフィールドに出かけたり、標本を見るのは今回が初めてとなった。

一つ目のアジアにおける哺乳類の種多様性研究は、私が10年ほど前から取り組んでいる研究テーマである。日本を含めたアジアは世界的にも哺乳類の種多様性が高く、その原因として多様な地形や環境と、動物分布の複雑な変遷が関わっているとされる。一方で、小型哺乳類をはじめとして種分類体系には依然として混乱が見られる。これまで中国とベトナムでフィールドワークに基づく研究を行った経験から、その原因として標本の精査に基づく研究が十分でないことがある。特に国境を越えて広域に分布する種では、各国の研究者間で分類学的見解が大きく異なることが多い。その解決には、国境を越えて広域での分布調査や標本収集を行い、それらに基づく多国間共同研究が必要である。

そこで総合博物館が拠点機関になり、2011～13年度に日本、中国、韓国、ベトナム4ヶ国で日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業、2014～16年度に日本、中国、韓国、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア7ヶ国で日本学術振興会研究拠点形成事業B、アジア・アフリカ学術基盤形成型を展開し、アジア脊椎動物種多様性の共同研究の推進と標本・研究者ネットワークの構築を進めてきた。これまでの中国とベトナムでの私の研究で学術的問題の多い分類群がタイやミャンマーにも連続して分布しており、今回のタイ滞在中にフィールドワークや博物館での標本調査を行って、問題解決に取り組んだ。また、タイの哺乳類研究者との討論やチュラロンコン大学以外の博物館での標本調査も進めた。研究拠点形成事業の一環としては、脊椎動物種多様性国際シンポジウムや関連ワー

クショップをチュラロンコン大学で2015年12月に開催した（ニュースレター36号に関連記事を掲載）。

タイは中国に見られる動物種が北部に見られる一方で、南部にはマレーシア半島部の動物種と関わりが深く、動物相が移行的に変化することなどによって多様な動物相が地域ごとに形成されていることがわかり、今後はさらに共同研究を展開していく予定である。



チュラロンコン大学理学部自然史博物館

二つ目の大学博物館の役割と機能の再定義は、総合博物館で現在進めている博物館科学に関する研究テーマである。2012年の調査によると、タイには71の大学に172の大学博物館がある。タイにはたくさんの大学博物館があるわけだが、なぜ多くの大学博物館が存在するのか？、大学博物館が果たしている役割や機能は何であるのか？、標本や資料はどのように維持されているのか？、等いろいろなことが気になっていた。調査ではマヒドール大学に23、チュラロンコン大学に20、カセサート大学に16と、伝統のある研究型大学には、一つの大学の中に多くの大学博物館があることも興味深い。

博物館科学のこのテーマを進めるために、滞在中に大学博物館を主として、できるだけ多くのタイの博物館や科学センターなどの関係する施設に出かけていって、自分の目で見るとともに、博物館で研究に関わるスタッフから直接に話を聞くことを行った。また、展示や標本収蔵庫では、標本に加えて、過去の研究に関わる写真や関連資料がどのように扱われているかに注目した。チュラロンコン大学ではチュラロンコン大学博物館、自然史博物館、薬学博物館、歯学博物館、人体博物館、タイ伝統音楽の博物館などで調査を行った。このほかにカセサート大学（動物学博物館、水産学博物館、昆虫博物館、アリ博物館、林学展示室）、バンコク大学（東南アジア陶磁器博物館）、プリンス・オブ・ソンクラ大学（自然史博物館、歴史展示室）、タクシ

ン大学（民俗学博物館）、チェンマイ大学（生物学博物館）、パヤップ大学（タイキリスト教アーカイブ、タイ北部資料展示室）、国立科学博物館機構自然史博物館などが研究に大きく寄与した博物館である。

タイでは標本や資料を残していくという考えが比較的良好に受け入れられていると感じた。そのためにこれまでの研究に用いられてきた標本や資料が残されている。日本の大学博物館や博物館における標本や資料に関する議論では、「捨てられてしまう」ということが大きな話題である。一方で、タイではそもそも蓄積されてきた標本や資料をわざわざ「捨てる」という考えが希薄なのかもしれない。一方で、標本や資料を、そのまま保管するだけでなく、よりよい状況で、そして将来の研究に活用していくという発想は日本の方が進展しているように思う。タイにいる間、ずっと「大学博物館とは何か」、「標本とは何か」を考える毎日であったが、納得のいく明確な答えは得られていない。これは研究人生をかけて解明すべき命題だと捉えるようになった。

もっとも、自然史標本における参照機能、証拠機能については、それぞれの標本をもとにしたこれまでの研究成果（つまり学術論文など）、自然界、学名の命名システムの三つとの関わりを再定義することができた。その内容は、2016年3月にベトナムで行われたベトナム



子ども大学デーでの生物学科ブース

ム国家博物館システムのシンポジウムで発表した。

タイの大学博物館では、標本や資料の保管が重要な役割で、展示は予約があるときだけ開館しているところも多い。一方で、最近はタイでも大学の成果や資源の社会への公開や活用への期待も高まっているようである。滞在中にタイではじめての「子ども大学デー」のイベントが行われ、理学部でも教員や大学院生、学部生が生物学の研究を紹介するブースを設けた。タイと日本のいずれの大学博物館でも、まだまだ多くの変化が今後見られるであろう。アジアの大学博物館の学術交流やネットワークの強化が、各大学博物館のよりよい発展、そして国際的な科学基盤の構築にとって不可欠であると考えようになり、在外研究を終えた。

（総合博物館 教授 本川雅治）

2016年「青空子ども博物館 in 円山」の開催



2016年5月5日（木・祝）に京都市東山区円山町の円山公園音楽堂において、恒例の「青空子ども博物館 in 円山」（以下、「青空子ども博物館」と略記）（共催：京都大学総合博物館・円山公園音楽堂事務局）が開催されました。このイベントは「こどもの日」にちなんで行われる「京都大学子ども博物館（以下、子ども博物館と略記）」の拡大出張版です。2008年から毎年行われており、本年で9回目の開催となりました。会場

周辺を偶然通りかかった方の参加も見られ、近年では「子ども博物館」や「京都大学総合博物館」について広く知っていただく発信の機会にもなっております。

午後1時、当館特定助教の網島 聖による挨拶によって予定通り開始されました。「子ども博物館」から「イルカのはなし」「へびのはなし」「えれめんトランプで遊ぼう」「世界の国々と国旗」「折り紙で遊ぼう」「勾玉をつくろう」などのプログラムが実施され、好評を博しました。また、「青空子ども博物館」では恒例行事となった「紙ヒコーキ大会」が本年度も実施され、上位3名には表彰の上、京大博物館ミュージアムショップから副賞が提供されました。本年度は「子ども博物館」や「青空子ども博物館」のOB・OGが、参加者として数多く戻ってきてくれたことも特徴的でした。連休最終日ではありましたが、天候にも恵まれ、終始例年以上の賑わいにつつまれました。

（総合博物館 特定助教 網島 聖）

中山大学との学術交流協定締結とセミナー開催

2016年3月17日（木）、中国の広州市にある中山大学で日中大学博物館学術セミナーを開催し、中山大学から3名、京都大学総合博物館から4名が収蔵資料の特徴や現状、展示と研究、大学博物館の果たす役割について発表した。中山大学には生物学博物館と人類学博物館があり、それぞれの設立の背景やコレクションの特徴について紹介がなされた。総合博物館からは、以下の4題の発表を行った。

岩崎奈緒子

A Treasury of Human and Natural History—Japan's First University Museum—

村上由美子

SPIRITS Program and Archaeological Research in the Kyoto University Museum

本川雅治

Species Diversity of Small Mammals and University Museum Network Formation in Asia

橋本裕子

Osteoarchaeological and Forensic Anthropological Research in the Kyoto University Museum



セミナーには社会学人類学、生命科学の学生約150名が参加し、熱気にあふれた会場では、発表をうけて活発な討論が繰り広げられた。会場となった馬丁堂（Martin Hall）は1905年に建てられた歴史ある西洋建築で、現在は人類学系の校舎となっている。

今回の広州訪問は、総合博物館が推進するSPIRITSプログラムの一環として実施したもので、京都大学総合博物館と中山大学社会学人類学学院、生命科学学院との学術交流協定の締結式を行ったほか、中山大学にある2つの博物館、広州市内の博物館（広州博物館、南越王墓博物館、南越王宮博物館）を訪問した。

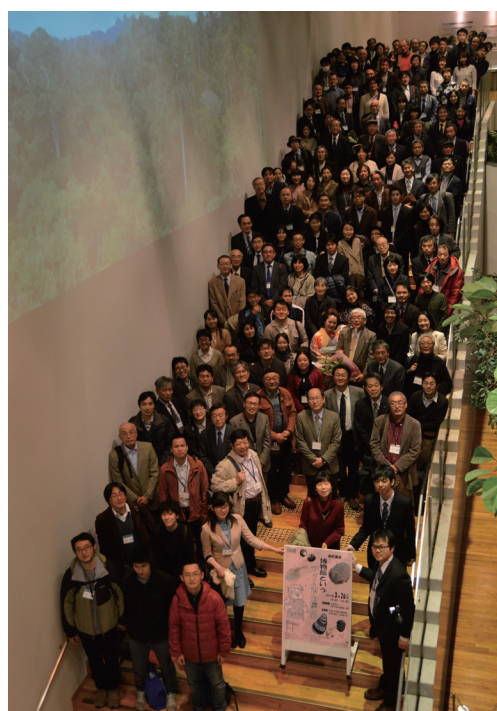
（総合博物館 准教授 村上由美子）

大野照文教授定年退職記念講演会の開催

2016年3月26日（土）14:00～16:30、京都大学総合博物館第二企画展示室を会場として、大野照文教授の定年退職を記念する講演会「博物館というフィールドの愉しみ」が開催されました。さまざまな分野で活躍された大野教授の講演会らしく、学内だけでなく国内外から206名もの参加者がありました。

講演は、大野教授の生い立ちから始まり、大学での研究の紹介、総合博物館の設立時の苦労話、そして大学博物館という新しい組織で取り組んでこられたさまざまな試みなど多岐にわたり、2時間以上にわたって熱く語っていただきました。

（総合博物館 教授 永益英敏）



新レクチャーシリーズがはじまる

2002年7月にスタートしたレクチャーシリーズは、地質学、天文学、動物学、歴史学をはじめとする多様な学術分野から138名の講師を招き、14年ものあいだ多くの聴講者に支えられてきました。本年度からは、先端研究をリードする本学研究者の魅力を、当館館長が対談形式で引き出す新しい開催スタイルに挑戦します。

対談の中では研究の概略だけでなく、研究を進める上での苦労話や、日々の研究生活などにも触れ、多くの聴講者に先端研究に対して親しみを感じてもらえるような形態を模索していきます。本年度は5～11月までの5回、昆虫生態学や天文学など、さまざまな分野で先端研究をリードする本学研究者に登壇いただけることとなりました。

初回の5月14日（土）は、私たち人間に最も近縁な



生き物であるチンパンジーを研究されている京都大学野生動物研究センターの中村美知夫先生に登壇いただきました。軽妙な語り口に、多くの聴講者が引き込まれた1時間でした。

（総合博物館 准教授 塩瀬隆之）

フィリピン大学からの訪問

2016年2月10日（水）にフィリピン大学の京都大学訪問団8名が総合博物館を見学しました。常設展と企画展を通じて大学の研究成果や研究資料を活用した大学博物館ならではの展示を見学し、展示に関わった大学院生と意見交換しました。収蔵室も見学し、京都大学の歴史とフィールドワークの伝統のもとで収集・収蔵されている多様な自然史資料が、現在も研究に活用されている状況を紹介しました。また、総合博物館が進めるアジアの大学博物館連携と新しい博物館科学のあり方について意見交換しました。



（総合博物館 教授 本川雅治）

ベトナム国立自然博物館からの訪問

2016年4月12～13日（火・水）にベトナム科学技術アカデミー ベトナム国立自然博物館訪問団6名が総合博物館を見学しました。これは同博物館の新しい博物館建設のために、アジアにおいてトップレベルの研究型博物館である総合博物館の展示と収蔵を視察し、総合博物館スタッフとの情報交換を進めるためのものです。研究標本の重要性について知ってもらうことができ、総合博物館と今後さらに学術交流を進めるよい機会となりました。

（総合博物館 教授 本川雅治）



新しい研究スタッフ

齋藤 歩 特定助教・研究資源アーカイブ系

2016年4月1日着任



4月に特定助教に着任し、研究資源アーカイブの事業に従事しています。以前は編集者として書籍やウェブサイトをつくりながら、この数年は学習院大学で「アーカイブズ学 Archival Science」の勉強をしてきました。

私の研究対象は、北米における建築資料の管理技法です。一見してこのような記録体は、研究資源と隔たりを感じるかもしれません。しかし双方には「個人文書 Papers」を多く含むという共通点があります。対照的に行政や企業のアーカイブズの大半が「業務記録 Records」であることから、その特性は明らかです。この対比は京都大学のアーカイブズ活動の理解にも役立ちます。文書館は国立大学法人の業務にともなう法人文書をおもな対象とする一方、研究資源アーカイブは個人文書をより多く含むからです。

記録にまつわる活動はアーカイブズ学の概念でその多くが説明可能です。結果、このように大学アーカイブズの両輪を認識し、大学の独自性獲得や研究支援への道筋を示します。個別の資料整理に加えて、こうした全体把握にも私の経験を活かしたいと考えています。

中山直英 研究員

2016年4月1日着任



4月より自然史の研究員として着任しました中山直英と申します。専門は魚類の分類学で、おもに「ソコダラ」とよばれる深海性のタラの仲間を研究してきました。

総合博物館では、魚類を中心とした脊椎動物の標本管理、データベース化、来館研究者の対応などを担当しています。分類学を含む自然史の研究では、博物館に保管されている標本が重要な研究資源になります。京都大学の魚類標本コレクションは総合博物館と舞鶴水産実験所の2カ所に保管され、国内外の研究者や学生によって積極的に利用されています。現在までに、30万点を越える標本が登録されており、その規模は大学関連の研究施設としては日本一です。

一般に、博物館の自然史標本は人類全体の「共有財産」として認識されています。世界的に有名な京都大学の魚類標本コレクションを次世代に引き継ぐべく、日々の業務に邁進していく所存です。また、充実した標本や研究機器を活用し、自身の研究も発展させていきたいと考えています。

横山 操 博物館研究員

2016年4月1日着任

2011年の埃及考古展に際し、コプト織物の調査機会を得て、世界最古級の類まれな貝紫染めが含まれることなどを明らかにした。資料洗浄、燻蒸や薬剤処理がなされない収蔵履歴に鑑み、染料・繊維分析の有効性は当初から確信できた。このように、学術資料元来の希少性を保持し、調査研究によって新たな学術的価値を付与するには、収蔵環境条件が非常に重要である。

今年度から、考古資料の保存管理と閲覧対応、そして素材や履歴も多様な文化史資料を対象として、収蔵環境の温湿度モニタリングを担当させていただいている。経年変化は自然界に普遍の現象であり、あらゆる材料の宿命である。たとえば、法隆寺を支える木材も、千年の長期スパンで見れば、経年によって強度は低下する。博物館の収蔵環境についてエコロジカルな最適条件を検証し、劣化現象を客観的に評価することによって、学術標本の将来的価値をより安全・確実・長期に担保する道を探り、大学博物館のミッションに貢献したいと考えている。

招へい研究員の紹介

柯 俊成 Chiun-Cheng Ko (台湾・国立台湾大学昆虫学系 教授)

招へい研究員 (客員教授) 2015 年 12 月 22 日～2016 年 3 月 21 日



It is a good experience for me to have had the pleasure of receiving acceptance of studying and learning for three months as a Visiting Research Scholar in Kyoto University Museum (KUM). My expertise is insect taxonomy, so I have the obligation to manage National Taiwan University (NTU) Insect Museum and collections. As a taxonomist of natural history, it would be a great opportunity for me to apply the professorship of Kyoto University where the most famous for museum studies, museum curation, and how museums developed into the institutional role in education through social and political forces. Such experience will help me in getting the global views world wide. I would be happy if I can study and collect informations from Kyoto University where produces some noble work.

Benefit from Kyoto University Museum collections, I really took advantage of this visit to know and learn much more about the collection related to biology. Biological collections are essential for biodiversity research, including systematics, ecology, evolution, agriculture/fishery, nature conservation, environmental health. In view of the alarming destruction of natural habitats and loss of the organisms therein, the value and function of the museums are all the more important. So, my speech in museum seminar is to talk about “How many species are there on earth?” The topic covers the introduction of Taiwanese biodiversity information. What are insects? Insects are animals that walk around on six legs. There's several million species of insects on this planet. In fact, of all animals on earth, of all animal species, 80 percent walks on six legs. Insects are not only there in nature, but they also are involved in our economy, usually without us knowing. It is the hope, for us to reconsider our relationship with insects, that the Insect Museum would take the role of bridging insects and our everyday life.

The Kyoto University Museum is one of the most excellent top university museums in Japan. They serve as research material for researchers and students from

around the world. It also seeks to enable the general public to benefit from the collection and research through exhibitions and outreach activities. From that perspective, I benefited international symposium on “From Petrie to Hamada –Egyptian Antiquities of Kyoto University”. This symposium told us about history of animal and human exchange in East Asia. In addition, I was fascinated by KUM Children's activities run by professional staffs and students. KUM Children's museum provides exhibits and programs to stimulate informal learning experiences for children.

During this stay I could also have the opportunities to Itami City Museum of Insects, this museum has been established in the wonderful natural environment of Koyaike Park so that people can learn the environment and its relation to human life by finding our about insects and other living things. Through the study activities at this museum, people will not only increase their knowledge of insects but also learn scientific methods of understanding and expand their appreciation of nature. Besides, Osaka museum of Natural History exhibits the wonders of nature that can be seen in Osaka. It would be helpful for us to go out in nature while staying in Japan, in full of information about indigenous insects, trees, birds, animals, rocks of Osaka. In addition, I could also enjoy one of Japan's representative traditional performing arts of Bunraku (文楽) in National Bunraku Theatre in Osaka and a major form of classical Japanese musical drama Nogaku (能楽) that has been performed since the 14th century in Kyoto. I really have the unforgettable experience during the stay.

Finally, we hope to establish multilateral cooperation and networking to intensify academic activities. In the future, to meet the audience's current and future needs, museum should get inspiration from university museum in how to communicate and make reach out to the surrounding community, analyzing the needs of the potential audience, and gerenally going further in community service. We anticipate that NTU Insect Museums will keep up the level of support and our colleagues will perform better academic research and provide better societal services. I would be happy if I could be the bridge platform to coordinate for the existing profits and benefits. We admire the free, open spirit of KUM, and deeply thank the warm invitation and hospitality during my stay. My visit will help me improving future plan as well as in getting the studies.

李 啓煌 Lee Gye-Whang (韓国・仁荷大学校文科大学日本語文化学科 教授)

招へい研究員(客員教授) 2015年9月21日～12月20日

李啓煌教授は、約3ヶ月のあいだ「豊臣秀吉評伝を書くための資料調査」として総合博物館で教育研究にあたりました。

11月13日(金)には、総合博物館セミナー第70回にて「戦国末期・近世初期における歴史像の脱構築を目指して：特に人物評伝を書くために」と題した講義がありました。講義では、自己紹介や韓国における自国・日本の歴史への関心の状況について、研究課題名に見える「豊臣秀吉評伝」を含む人物評伝について構成・論点を紹介・概説していただきました。同講義は、滞在中の教育研究の内容を端的にあらわしているため、以下その概要を紹介しておきます。

韓国における日本研究は、特定の時期に集中してしまい、一般的関心とも整合しないことがある。一般のひとは、韓国の歴史をおよそ知っていても、日本の歴史はほとんど知らないようだ。研究論文は、一般のひとに読まれることはないため、より良い広い理解を多くのひとへ知ってもらうためには、概説、通史のような理解しやすい内容がもめられる。そこで、多くの先行研究のある(現在に結びつく過去でもある)戦国大名の時期から近世初期を対象に、書名は『日本近世の夜明けを拓く人々』(仮称)とし、構成は、はじめに(前書)／1 戦国大名の誕生とその展開／2 織田信長政権／3 豊臣秀吉政権／4 徳川家康政権／むすびに(後書)、とする。なお、この時期を論じる際、特



定の人物だけを取り上げても概説として不十分となるため、複数の人物を取り上げる。

講義では、論点、留意点として、戦国大名論、織田信長政権、豊臣秀吉政権、の三つをあげ、戦国大名領の不安定性・拡張性の問題から、織田政権の性格、足利義昭亡命政権や天皇との関わり、つづく秀吉の惣無事令、関白就任と天皇との関係、対外侵略(文禄・慶長の役)の理解、などを考察しました。とくに対外侵略については、しばしば絶え間なく知行を与えなければならないことの圧力から説明される一方、なぜ徳川幕府は大きな対外侵略をせずその状態を維持できたか、どこで価値観が転換したのか、かんがえる必要があることを指摘されました。

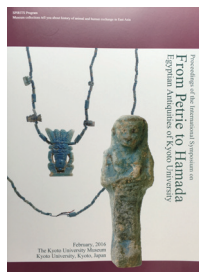
滞在中の研究成果を概説として韓国で公表・紹介することへの意欲をうかがえました。

(総合博物館 講師 五島敏芳)

総合博物館の刊行物



挑戦する大学博物館
—学術標本・人・情報をつなげる博物館科学の創成にむけて—
妹尾裕介(編)
2015年12月



Proceedings of the
International Symposium
on From Petrie to Hamada
Egyptian Antiquities of
Kyoto University
網島聖(編)
2016年2月



総合博物館収蔵目録 第1号
京都大学総合博物館考古学資料目録 エジプト出土資料
京都大学大学院文学研究科考古学専修・京都大学総合博物館(編)
2016年2月



京のイルカと学びのドラマ
京大と学校現場で紡ぐ「アクティブ・ラーニング」をめぐる航海日誌
京都大学総合博物館(編)
2016年3月



「探究活動」で、大学ができること 研究大学からの社会貢献
蒲生諒太(著)
2016年3月

研究資源アーカイブ通信 堀田満映像資料：映画フィルム、1960—ca.1982



16mm フィルム資料一例（資料番号 1-12）

17	KVO	1	6.29	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
18	KVO	1	6.27	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
19	KVO	1	7.32	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
20	KVO	1	8.25	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
21	KVO	1	8.22	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
22	KVO	1	8.24	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
23	KVO	1	8.27	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
24	KVO	1	8.41	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
25	KVO	1	10.42	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
26	KVO	1	10.43	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
27	KVO	1	11.22	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
28	KVO	1	11.22	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
29	KVO	1	12.40	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
30	KVO	1	12.16	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
31	KVO	1	12.34	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
32	KVO	1	12.40	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
33	KVO	1	12.50	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
34	KVO	1	13.11	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
35	KVO	1	13.17	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
36	KVO	1	14.04	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
37	KVO	1	14.27	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
38	KVO	1	14.55	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
39	KVO	1	15.39	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
40	KVO	1	16.51	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
41	KVO	1	18.15	Hotta	1975.7	東郷の山手	新築住宅街
42	KVO	1	21.22	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
43	KVO	1	23.26	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
44	KVO	1	23.52	Hotta	1975.5	東郷の山手	新築住宅街
45	KVO	1	24.12	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
46	KVO	1	25.21	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
47	KVO	1	25.52	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
48	KVO	1	26.50	Hotta	1975.11	東郷の山手	新築住宅街
49	KVO	1	27.05	Hotta	1975.5	東郷の山手	新築住宅街
50	KVO	1	28.40	Hotta	1975.5	東郷の山手	新築住宅街
51	KVO	1	29.53	Hotta	1975.5	東郷の山手	新築住宅街
52	KVO	1	30.49	Hotta	1975.5	東郷の山手	新築住宅街
53	KVO	1	30.24	Hotta	1975.5	東郷の山手	新築住宅街
54	KVO	1	30.31	Hotta	1975.3	東郷の山手	新築住宅街
55	KVO	1	30.39	Hotta	1975.3	東郷の山手	新築住宅街
56	KVO	1	30.40	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街
57	KVO	1	30.40	Hotta	1975.4	東郷の山手	新築住宅街

映像の時間ごとと場面データ
(テキストファイル部分)

映像機器類と堀田先生（西南日本植物情報研究所にて。2010年3月3日）

堀田満は、京都大学大学院を修了し理学博士の学位取得後、1972年から1988年まで京都大学教養部の助教授をつとめた植物学者だ。1988年より鹿児島大学理学部教授となり、2001年の定年退官後に鹿児島大学名誉教授、また西南日本植物情報研究所の所長でもあった。2015年7月8日に亡くなられた。

このデジタルコレクションは、堀田の京都大学と関わる時期の映像資料からなる。2012年から館内公開され、2015年3月に一般公開された。

すこし前の成果ながら今回あらためて紹介する理由は、対象資料の調査や整理の特徴にある。研究資料は、しばしば当事者がいなくなった後、行き場を失い散逸する。行き場に困って、資料保存利用機関に声がかかり保存されることもある。こうした経緯で受け入れた研究資料は、資料の内容からだけではわからない脈絡の情報を当事者に聞いて資料を理解することができない。堀田満映像資料の場合、資料の作成者である堀田満先生へ各資料について話を聞くことができ情報提供のご協力をいただいた。資料を作成した研究者みずから資料の説明を用意した貴重な事例となった。

対象資料が映画フィルムなので、映像内容の確認は基本的に映写機での上映によるほかない。1980年代まで撮影に使用し、ビデオ撮影に移行した後、おそらく再生の機会はなかったとおもわれる。資料をお預かりする際、堀田先生に資料の番号と何の資料かを示すラベルシールを貼っていただいたが、映像内容を確認しない時点の作業である。フィルム缶やリールヘフェルトペン類で記した当時の記載を参照したのだろう。お預かりの後、デジタル化（テレシネ）し、その映像データを先生へ送った。先生が映像を確認し、各映像の時間と場面概要を記した955行におよぶ一覧表ができあがる。さらに西南日本植物情報研究所で資料や研究の話を通じて直接うかがった。堀田先生の教育研究活動の概略は、自身の業績のまとめを提供していただき、『エコソフィア』誌への6回にわたる自伝的連載記事を参照して把握した。資料実物は、総合博物館へ送られてきた状態と堀田先生の付したラベルを尊重して整理された。資料の情報は、実物

から得られる書誌的データと時間・場面概要の一覧表とを総合して、整備を進めた。

はじめデジタルコレクションは箱や缶ごとの単位で各フィルムへアクセスできるように構成されたが、フィルムの単位と映像（とくに各場面）とが内容的に一致・連続しないこともあるため、映像と関わる研究活動を地理的に区分しアクセスできるような索引を加えた。このとき堀田先生の教育研究活動を再点検し、一部の資料の情報には時空間情報も付与した。およそ資料の理解の助けとなる情報が整ったとかがえ、若干の不明部分を残すも一般公開を急いだ。

不明部分には、堀田先生ご自身が映像をご覧になってから付与された情報と映像撮影時の調査に関わる事務書類等の傍証との相違、研究と関わりながら市民活動に含まれるかもしれない部分などが含まれる。あらためて聞き取りの追加調査をしたいとかがえていたところ、ずいぶん後にになってご逝去を知った。

反省点は多い。資料の理解に時間を費やしすぎたが、資料への調査が進んでから不明なことが明らかになることもある。むしろ聞き取りの機会を活かせなかったことが大きい。事前に時間・場面概要の一覧表をいただいていたが、聞き取りまでに堀田先生の教育研究活動の詳細や傍証の調査を進められなかった。

ただ、先生から資料の周辺は直接うかがえた。植物を映像でとらえようとした理由、画帖やPCでの絵、絵本の原画のこと、鹿児島での生活、環境保護へのおもい、等などが印象に残っている。ふつう映像は、撮影者が意図をもって目に見える範囲からカメラに映る範囲と時間とを切り取って成立する。堀田満映像資料に収められる各所の日常風景は、おそらく植物と無関係ではなく、植物の利用、流通、環境などへの注目を想像させる。話を聞いたことの効果であろう。

一連の映像は、京都大学デジタルアーカイブシステムから見ることができる。ぜひご覧いただきたい。堀田先生が見て残そうとした世界に引き込まれるにちがいない。

（総合博物館 講師 五島敏芳）

総合博物館日誌（平成 28 年 3 月～ 6 月）

展示

2 月 10 日(水)～ 4 月 17 日(日) 平成 27 年度特別展 「文化財発掘Ⅱ」 ―京大キャンパスの弥生時代―

関連企画

3 月 26 日(土) 講演「弥生時代の土器と木製品 ―米食のはじまりと、暮らしを支えた道具たち―
講師 村上由美子（総合博物館）／妹尾裕介（金沢大学埋蔵文化財調査センター）
4 月 2 日(土) 講演「京都大学キャンパスの弥生時代 ―水田・洪水・墓―」
講師 伊藤淳史（文化財総合研究センター）／富井 眞（文化財総合研究センター）

4 月 6 日(水)～ 6 月 26 日(日) 平成 28 年度特別展 「ねむり展 眠れるものの文化誌」

関連企画

4 月 9 日(土) ギャラリートーク「チンパンジーはベッド職人」
講師 座馬耕一郎（アフリカ地域研究資料センター・研究員）
4 月 9 日(土)・5 月 14 日(土) ワークショップ「チンパンジーのベッドを作ってみよう」
講師 座馬耕一郎（アフリカ地域研究資料センター・研究員）
4 月 10 日(日) シンポジウム「新しいねむりに目を覚まそう ―人類進化と眠りの多様性を求めて―」
パネリスト 山極壽一（京都大学総長）／石黒浩（大阪大学基礎工学研究科特別教授
& A T R 石黒浩特別研究室室長（A T R フェロー））／座馬耕一郎（アフリカ地域研究資料
センター・研究員）／重田眞義（アフリカ地域研究資料センター長）
4 月 23 日(土) セミナー「快眠セミナー：眠りにつまずいてしまったら―睡眠障害への処方箋―」
講師 中川晶（奈良学園大学教授・なかがわ中之島クリニック院長・N P O 法人睡眠文化
研究会理事）
5 月 15 日(日) 対談「睡眠文化対談：京の夢文化と魔の時間」
講師 小松和彦（国際日本文化研究センター所長）／藤本憲一（武庫川女子大学教授・
N P O 法人睡眠文化研究会理事）

イベント

3 月 26 日(土) 最終講演「博物館というフィールドの愉しみ」大野照文（総合博物館・教授）

5 月 5 日(木) 青空子ども博物館 in 円山

6 月 19 日(日) 京都千年天文学街道・第 25 回アストロトーク

講演「夏の星空 ヘルクレス さそり いて座を訪ねて」作花一志（京都情報大学大学院・教授）
4 次元宇宙シアター「3 D メガネでみる宇宙のすがた～月と火星はどんな星？～」青木成一郎（京都大学天文普及
プロジェクト室・室長／京都情報大学院大学・准教授）

レクチャーシリーズ

5 月 14 日(土) 第 139 回 野生のチンパンジーの障害児と他個体によるケア 中村 美知夫（野生動物研究センター・准教授）

6 月 11 日(土) 第 140 回 球になると毒になる？アルツハイマー病の脳でな 星 美奈子（医学研究科・准教授）
ぜ神経細胞が死ぬのか

博物館セミナー

5 月 13 日(金) 第 76 回 大学に求められる障害（disability）へのアプロー 村田 淳（学生総合支援センター障害学生支援ルーム）
チー障害者差別解消法への対応

6 月 10 日(金) 第 77 回 日本周辺におけるソコダラ科魚類の分類と多様性 中山直英（総合博物館・研究員）

入館者数

14,095 名（うち特別観覧 51 団体 2,854 名）

発行日 2016 年 7 月 15 日
編集・発行 京都大学総合博物館 電話 075-753-3272
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 FAX 075-753-3277
<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/>